

『今月の天候と農作業』

通巻第5614号
4月号
平成30年3月29日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

1週目は気温がかなり高く、2週目は気温が低い見込みで、期間の前半は気温の変動が大きいです。

【予報のポイント】

1週目は気温がかなり高くなりますが、2週目は寒気が流れ込むため気温が低い見込みで、期間の前半は気温の変動が大きいです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	30	50
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	30	40

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わります。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、奄美地方で少ない確率50%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、低い確率50%です。3～4週目は、高い確率50%です。

<1週目の予報> 3月31日(土)～4月6日(金)

期間の中頃までは高気圧に覆われて概ね晴れますが、終わりは気圧の谷の影響で雲が広がりやすいでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2週目の予報> 4月7日(土)～4月13日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、高気圧に覆われやすく、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 4月14日(土)～4月27日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、気圧の谷や湿った空気の影響で、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

普通作物

◆早期水稻

1 移植作業と水管理

移植後に低温や日照不足となった年は有効穂が不足し、減収しやすくなります。こうした状況が発生しやすいほ場では、株間を確認しながら、適正な株数を植え込みましょう。活着までの約一週間は寒害や葉からの水分蒸散量を抑えるために深水とします。その後、暖かい日は浅水で水温上昇に努めます。

2 病虫害対策

いもち病の対策を適切に行います。移植前に箱施薬を行いますが、購入苗は既に処理済みのものもあるので、確認が必要です。また、粒剤の除草剤を誤って苗箱に散布しないよう注意します。移植後の余り苗は葉いもちの発生源になるため、補植後直ちに処分します。スクミリングガイ（ジャンボタニシ）発生田では、浅水管理や薬剤での防除を行います。

3 除草対策

除草剤は、ラベルの記載内容をよく確認し、適切に使用しましょう。使用時期はノビエの葉期で処理晩限が記載されており、最も生育の早いヒエを基準とします。稲が徒長気味や寒害に遭った軟弱苗は、効果の範囲内で苗の回復を待って散布します。ジャンボ剤では薬剤の拡散や薬害防止のために水深を十分に保ちます。予め畦や水尻からの漏水を点検し、散布後1週間は水尻をしっかりと止めましょう。

◆麦類

赤かび病防除のため、小麦では穂揃期（開花期）に、二条大麦では穂揃期から7～10日後（葎殻抽出期）に防除し、その7日目頃に2回目の防除を行います。今年は生育が早く、防除が遅れないように注意が必要です。

収穫までの登熟日数は出穂後小麦で45日、二条大麦では40日程度です。湿害を回避し、収量の安定化のために作溝するなど排水対策を徹底しましょう。

（荒砂 英人）

施設野菜

◆きゅうり

日中の気温上昇に伴い、日射しも強くなり、蒸散量が多くなりますので、かん水量を増やします。また、葉に強い直射日光が当たると、葉の老化や葉焼け症等が発生するので、日中は内張カーテン等を利用し、日射量を調節します。特に、ハウス内は乾燥しやすく、湿度の低下は曲がり果や尻細果等の発生につながるため、ハウス内が乾燥している場合には、通路散水等による湿度確保に努めます。

◆ピーマン

最低夜温が上昇し、内張カーテンを閉めると暖房機が稼働しない日が続くようになります。このような日は、ハウス内の湿度が高まり病害が発生しやすくなるので、ハウス外の最低気温が14℃以上の場合には、内カーテンは開けたままにし、暖房機が稼働するように管理します。また、強光線による日焼け果等の発生防止のため、日中は内カーテン等を利用し、日射量を調節するとともに、換気に努め、ハウス内の温度は30℃以下で管理します。

茎葉が繁茂し、光線の透過不足等による白果や収穫遅れによる赤果の発生と成り疲れ等によるうどんこ病の発生が予想されます。適期収穫を徹底し、着果のない中枝や老化枝、主枝上部の徒長枝など、光線を遮っている茎葉の整枝・せん定を行います。また、土壌水分が不足すると草勢が著しく低下するため、こまめなかん水・追肥による草勢維持に努めます。

◆トマト類

ミニトマトは気温上昇に伴い裂果が多くなるので、かん水量に注意します。また、空中湿度を下げるために日中の換気を徹底し、収穫遅れがないよう適期収穫に努めます。

大玉トマトは、高温で乾燥すると尻腐果の発生が多くなるので、かん水量を徐々に増やします。また、草勢が低下すると小玉果となり、軟果玉や裂果が発生するので追肥が遅れないように注意します。

◆いちご

収穫も終盤となり、次年度用の育苗作業に移ってきます。特に、炭疽病の発生等による苗不足は収量の減少に直結します。炭疽病の発生を防止するために感染していない健全な親株を使用するとともに、感染の疑いのある苗は周囲の苗も含め早期に除去・処分するなど、万全の対策を実施します。

(黒木 正晶)

葉茎菜類及びいも類

◆栽培ほ場の土壌水分の確保

今月は上旬からマルチ栽培のかんしょ、さといもの植付け及び各種夏野菜のは種適期となります。土壌が乾燥した状態でマルチ被覆を行うと、発芽不良や生育障害、品質低下につながるため、適当な土壌水分（手で握って団子になる程度）の時に畝立てマルチ張りを行いましょう。

◆さといも

早生種のマルチ栽培は萌芽の時期です。萌芽を開始したらマルチに穴を開けて芽出しを行います。また、中生さといもは植付け期です。

近年、深刻な被害を及ぼしている疫病の伝染を防ぐため、種芋を取った後の残さは付近の空き地に絶対に放棄せず、速やかにほ場でロータリー耕耘を行い、細かく破碎し分解させるか堆肥化します。

◆食用かんしょ

マルチ栽培の植付け時期です。苗床は外気にならし灌水も徐々に減らして苗の馴化を図ります。上旬は遅霜や平均気温が下がることから植付け後の活着が悪く、欠株も生じやすくなるので、気候の変化に注意します。採苗は植付け予定の3～5日前の午後に行い、温湿度を保ちながら保管し（取り置き苗）、発根を促します。曇雨天で暖かい日に植付けします。

◆ばれいしょ

萌芽～生育期です。定期的にあぶらむシ、疫病の予防を行います。

◆スイートコーン

大型・小型トンネル栽培は、4月上～中旬の雄穂抽出期が追肥の時期となります。雄穂が出始めたら窒素成分で10aあたり5～6kgを追肥します。追肥の時期が遅れると効果がないので適期に施用することが重要です。雄穂抽出から10日～2週間後に雌穂（絹糸）が抽出し、その部分が果実となります。ボリュームがあり、先端まで充実したスイートコーンを生産するためには土壌水分が必要となるので、通路への湛水等を行いましょう。また、トンネル内の高温による葉焼け等を防止するため、ビニールの開閉管理や除去には細心の注意を払いましょう。株元からの分けつは光合成による養分確保を行うので、除去しないようにしまししょう。

◆ オクラ

中旬以降が播種期です。上旬は気温が低いため、立ち枯れ病が多発しやすくなります。早播きする場合はトンネル被覆し、地温を上げる対策が必要です。

(杉村 幸代)

果 樹

1 常緑果樹

◆かんきつ全般

今年は着花数が多い「表年」となることが予想され、多くの養分を必要とします。

また、最近では発芽から開花までの期間が短く、花の充実不足に伴う生理落果が多く見られます。新梢や花芽の充実のために発芽期～開花期にかけて窒素主体の葉面散布を数回行いましょう。

◆完熟きんかん

剪定が終わっていない園は、4月上旬までに急いで実施します。十分なかん水、春肥の施用、土壌改良資材や完熟堆肥等の有機物の投入により樹勢回復を図りましょう。

発芽揃いを良くするために施設内の蒸し込みを行うとともに、新梢の充実を図るために窒素主体の葉面散布を数回行いましょう。

◆日向夏

結果安定には人工受粉の実施が必須です。適切な条件で花粉を採取し、精製してから受粉に利用しましょう。精製した花粉は発芽率の調査をした上で、適正な倍率に希釈してから受粉に利用しましょう。

◆マンゴー

今年は出蕾の遅れにより、生育が2週間程度遅れている園が多くなっています。適切な温度管理、早期摘果を徹底しましょう。

収穫が近づくにつれて果皮が弱くなり、冷気流入や高湿度によるあざ果症や果皮の結露によるやに果が増加してきます。ハウス内の急激な温度変化を防ぎ、ヒートポンプや早朝の換気による除湿によって結露を防止しましょう。

また、新芽の発生が増加にあわせてアザミウマ類の発生が多くなります。発生した新芽は全て除去し、アザミウマ類の発生を防止しましょう。

2 落葉果樹

◆かき

摘蕾は生理落果後の摘果に比べて樹体養分の確保や翌年の花芽分化に有効です。開花始め頃から二分咲までの間に実施しましょう。1結果枝当たり1花を原則とし、長い結果枝には2～3花とします。

(鈴木 美里)

花 き

◆電照ギク

ハウスの換気を徹底し、茎葉のしまった水揚げの良い切り花にします。曇天が続くと湿度が高まり、白さび病が発生しやすくなります。親株からの徹底した防除で本ぼへの持ち込みを防ぐと共に、定期的な予防で発生を防ぎます。

秋ギクの親株育成の時期です。育苗は作型と穂冷蔵の有無等の条件を考慮し、所要日数を計算して計画的に作業を進めてください。

◆夏秋ギク

8月出荷作型の挿し芽を中旬から順次行います。過剰な肥料の投入は生理障害の原因となるので、事前に土壌分析を実施し、投入量を決めます。5～6月出荷作型のフローラル優香は、低温により貫生花の発生が増加するので、4月いっぱいまでは10℃、消灯後3週間程度は16℃を保ってください。精の一世については、7月出荷作型は幼若性を獲得する恐れがあるので、消灯前は12℃程度、消灯後は18℃程度の夜温を確保しましょう。

◆スイートピー

受粉～子実の肥大期です。草勢の強い株は低温要求の高い性質の恐れがあるので、収穫開始節等を確認します。つる下げを行い、受粉時期のかん水、施肥管理は草勢を見て行い、莢が大きくなり始めたら徐々に薄い液肥を施用してください。定期的な葉面散布も効果的です。採種管理は次作への投資です。大きく、重い種子を用いて生産すると収量と品質が高まるので、適切な肥培管理で充実した種子を生産しましょう。

◆ホオズキ

7月出荷予定の作型では中～下旬にはマルハナバチを導入し、着果の促進を図りましょう。また、最低温度が10℃を下回ると、花粉の発芽が悪く、着果不良となるので、気温確保に努めます。立ち枯れ性病害対策として土壌消毒を必ず実施しましょう。

◆シキミ

春芽の萌芽時期です。定期的な防除を実施し、黒しみ斑点病やサビダニ類の発生を抑えましょう。

◆ラナンキュラス

出荷が終了したほ場で球根養成を行う場合はウイルス罹病株を抜き取り、廃棄します。養成株は、蕾をできるだけ早く摘除し、球根の肥大を促し、その後徐々にかん水頻度を減らします。

(中村 広)

畜 産

◆家畜防疫

海外においては、高病原性鳥インフルエンザや口蹄疫が継続的に発生しており、国内へのウイルス侵入リスクは高い状況にあります。定期的な場内・畜舎内消毒に加え、野生動物の侵入防止など徹底的に防疫を実施しましょう。

また、家畜の生産性に影響を及ぼす他の感染症についても気温の日較差が大きくなる季節は家畜の免疫力が低下し、病気にかかりやすくなる季節です。寒い夜間はカーテンやコンパネを設置し、風が直接あたらないようにし、暖かい日中はカーテンを開放し換気するなど家畜の体調管理には十分に気を付けましょう。床換えは定期的に行い、家畜が常に清潔な環境下で飼育できるようにしましょう。病気の発生時に早期対処できるように家畜の健康状態の観察を徹底しましょう。

◆飼料作物

今月はトウモロコシ、ソルガムの播種時期です。栄養価の高い飼料作物を栽培するためには肥培管理が不可欠です。本県の畑地土壤のほとんどは黒ボク土といわれる火山灰土壤です。黒ボク土はpHが低く、リン酸吸収も高い土壤です。作付けする前に土壤分析を行い、堆肥の適正施用を行いましょう。土壤のpH矯正（酸性→弱酸性）には苦土石灰を用い、リン酸の補給としてヨウリンなどの土壤改良材もあわせて施用しましょう。

イタリアンライグラスの収穫も本格化します。イタリアンライグラスの収穫適期は出穂期です。出穂期の大まかな目安は畑全体の4～6割が出穂した時です。刈り遅れると飼料中のタンパク質の減少や、牛が消化できない繊維質が増加するので、適期刈取りを行いましょう。

(大山 佐喜子)

工芸作物

◆茶

1 防霜対策

一番茶の生育に合わせて、センサー温度設定の確認と防霜ファンの首振り角度や回転方向、スプリンクラーヘッドの詰まり等を再確認し、誤作動による霜害が出ないように注意します。

2 施肥と防除

芽出し肥は硫安等の速効性肥料を摘採の25日前までに散布します。

カンザワハダニは気温の上昇に伴い密度が増加するため、発生状況に注意し、地区の栽培暦に準じて、葉裏にかかるよう丁寧に薬剤散布します。また、ツマグロアオカスミカメやマダラカサハラハムシ、コミカンアブラムシ等の発生にも注意しましょう。

3 一番茶の摘採及び製造

本年は3月より平均気温が平年を上回っており、一番茶摘採は平年より2～3日早い開始が見込まれます。

単価アップのためには良質生葉の生産が不可欠です。茶工場の処理能力や一番茶の生育状況・降雨等を考慮し、摘み遅れとならないよう摘採計画を立て適期摘採を行います。

また、事前に摘採機の刃研ぎや製茶機の点検・清掃・試運転等を行い、トラブル回避に努めます。摘採時は摘採袋等への生葉の詰め過ぎを避け、摘採後は速やかに茶工場へ持ち込み、欠陥のない荒茶製造に努めます。荒茶への異物混入防止対策にも万全を期しましょう。

4 チャトゲコナジラミ対策

県内の茶園でも、チャトゲコナジラミ発生が徐々に拡大しています。下記の①～③を参考に観察を行い、見慣れない虫を発見した際は最寄りの農業改良普及センター等へ連絡をお願いします。

- ① 成虫は新芽に群がるので、茶園では新芽を観察する。
- ② 茶園の畝間にあるクモの巣などを観察する
- ③ 摘採袋や生葉コンテナの周囲を観察する。

(黒木 清人)

◆しいたけ

1 選別

乾しいたけは、用途に応じて取引されるので、商品価値を高めて販売するためにも、規格表を参考に必ず選別を行います。特に、次の点に注意しましょう。

- ① 異物（虫、金属類等）は絶対入れない。
- ② 乾燥不良、虫害、カビ、黒子など規格外品は絶対に混ぜない。
- ③ 3 cm以下を他のサイズに混ぜない。
- ④ バレと縁に巻きがあるものは別々にする。
- ⑤ できるだけ種菌、採取時期、日和子（ひよりこ）、雨子（あまこ）別に行う。
- ⑥ 丸形と変形とは区別する。
- ⑦ 雨の日など湿度の高い時には行わない。

2 箱詰め

箱詰めは最初からたくさん入れずに、まず二分入れて揺すり込み、さらに4分、6分、8分と入れ、最後に11分ほど入れて丹念に揺すり込む。箱詰めがゆるいと輸送途中で欠け葉を生じ、商品価値の低下を招く恐れがあるので注意が必要です。

3 採取

気象情報に注意しながら適期採取に努めましょう。

(永野 学)

◆たばこ

今月は土寄・ほ地内環境整備・収穫・乾燥に向けた準備が主な作業となります。

- 1 土寄は植付け30～40日後に作柄に応じて実施しましょう。時期が早すぎると幹が傷つき、腰折病等の病害発生の原因となります。また、遅すぎると肥料吸収が遅れ、作柄が晩作化します。
不定根の発達を促進し、本葉系を充実させるために土寄は確実に実施しましょう。植穴の固結や畦内土壌の固いほ地の対応は、土壌をほぐしながら穴埋めすることが大切です。特に、ローラー土寄を行った際には土が寄せられているか確認し、株元までしっかり土寄せを行きましょう。
- 2 ほ地内に水が溜まると生育不良や病害発生の原因となるので、ほ地周囲や枕地に畑地・水田とともに、ほ地の形状に合わせて排水溝を設置し

ましよう。

- 3 異物混入防止のため、植付け穴のちぎれそうなマルチやほ地内に落ちているマルチ片を回収しましょう。
- 4 収穫・乾燥へ向けて作業場・貯蔵庫の清掃、使用物品の点検更新及び乾燥機の点検・空焚きを実施しましょう。
- 5 農薬を使用する際には「たばこ用農薬の使用基準」を遵守し、他作物へのドリフト（農薬飛散）がないよう注意しましょう。また、使用後は「農薬使用実績票」等に必ず記帳しましょう。

（宮崎県たばこ耕作組合）

内容の詳細について

4月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

（<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>）

向こう 1 カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	いもち病	—	置き苗は、いもち病の発生源や伝染源となるので早めに処分します。箱施薬をしていないほ場で、イネミズゾウムシの発生が目立ち始めたら粒剤の水面施用を行います。 スクミリンゴガイの生息数が多い場合は、捕殺あるいは粒剤を水面施用します。また、用排水路からの侵入を防ぐため、水の出入口にネットを設置します。
	イネミズゾウムシ スクミリンゴガイ	—	
		—	
野菜・工芸作物	アブラムシ類	並	各種植物ウイルス病を媒介するので、早期発見・防除に努めます。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 褐斑病 灰色かび病	やや少 並 並 並	いずれの病害も多発すると防除効果が上がりにくいので予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。 また、罹病葉は伝染源となるので、適宜摘葉し、ほ場外に持ち出します。 黄化えそ病の感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。 また、本病を媒介するミナミキイロアザミウマは、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので最少でも7日間隔で3回の連続防除を行います。
	黄化えそ病 (MYSV)	前年、前々年より少ない	
	ミナミキイロアザミウマ タバココナジラミ	並 やや少	
冬春ピーマン	うどんこ病 斑点病 黒枯病	並 少 並	いずれの病害も発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防・初期防除に重点をおきます。また、罹病した茎葉は重要な伝染源となるので速やかに除去します。 アザミウマ類は、気温の上昇とともに増殖しやすくなるので、発生初期に防除を行い、中～多発生のは場では短い間隔で定期的に薬剤散布を行います。ヒラズハナアザミウマは主に花に生息するため、着花の少ない時期の丁寧な防除が効果的です。
	ミナミキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ タバココナジラミ	少 やや多 並	
冬春トマト	灰色かび病 葉かび病 うどんこ病 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	並 やや多 並 並	気温の上昇により加温機の稼働時間が短くなり、果実等が結露しやすくなるので、循環扇を作動させるなど施設内環境の改善に努めます。 タバココナジラミは、気温の上昇に伴い活動・増殖が活発になります。トマト黄化葉巻病など本種によって媒介されるウイルス病が問題となっていますので、各人が防除を徹底し、地域全体の密度低下に努めます。
	タバココナジラミ	少	
冬春いちご	うどんこ病 灰色かび病	やや少 少	株整理後の葉数が少なくなった時に、薬剤散布を行うと効果が高まります。いずれも薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。 特にハダニ類、オンシツコナジラミについては、地域により薬剤感受性の低下が確認されているので、地区の普及指導員や技術員の情報を参考にして防除する必要があります。
	ハダニ類 オンシツコナジラミ	並 少	
カンキツ	そうか病 かいよう病	— —	いずれの病害も、罹病した枝葉は重要な伝染源となるので徹底的に除去します。 ミカンハダニの要防除水準は、寄生葉率30%あるいは葉当たり寄生虫数0.5～1頭です。
	ミカンハダニ	並	
茶	カンザワハダニ	やや少	一番茶萌芽期以降発生が多い場合には、農薬使用基準の摘採前日数等に注意して防除します。

- 1) ※は防除情報を発表しています。
- 2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
- 3) 宮崎県病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。

